



ソビエトの美術館

野 本 醇

(トレンチャコフ—エルミタージュ)

社会党議員3名と吉田豪介氏、鶴川五郎氏、小林英吉氏らと横浜からバイカル号でサワリンに向けて出発したのは昨年今頃であった。ハバロフスクから一行と別れてモスクワにTUR 114型機に乗込み9時間、ウクライナホテルの24階からハバロフスクで見た太陽がモスクワを真紅に染めて沈むのを見ていた。

『トレンチャコフ美術館』—ロシアの芸術のすべてが集められているといわれるこの建物はモスクワ河畔にあるレーニン像の指さす方向にある。画商トレンチャコフ氏の邸跡といわれる赤と白のレンガの古い建物である。

絵画はあめ色に輝き写実の粋をこらした絵肌はガラスのようにつややかで、その中に塗り込められた帝政ロシアのドラマは、そのまま古いロシアの歴史を語り

かけてくる。モスクワ大学の女子学生のガイドは美術史から政治史に変わって熱っぽい。しかし私の目はロシア正教のイコンの明るい色彩と現代絵画を思わせる形態のハッとさせる視覚的な美にうばわれていた。

年代順に並べられた古代から現代までの流れの中で、突如として民衆の意志が浮彫りされるレーニンの作品群、「拝火教徒の狂信的な行列」「船ひきの人々」等の作品はやはり現代ソビエト絵画の志向をしめした代表的な作家であった。やがてレーニンが描かれ庶民の身近かな生活のよろこびが画面を彩どることになんの不自然さも感じさせない。だが、自由な造形思考に馴れた私には強いその物語性や技術偏重のあまりに現代の芸術としてはなにかファクターを欠いているように思われた。

そのことは別の意味でレニングラードのエルミタージュ美術館を訪れた時も感じられものであった。この美術館は金に糸目をつけずに集めたエカチェリー12世のコレクションから始められたという。パリのルーブル美術館と肩を並べる傑出した美術館の一つである。レオナルドダビンチ、ラファエロ、ギリシヤからインドまでの彫刻群、ドラクロア、レンブラントの油ののりきった時代の作品。2階には現代作家の作品があり、ピカソの青、ピンクの時代、ゴッホ、ゴッギヤンのタヒチ時代、マルケ、マチス、ドガ、セザンヌ等々巨匠たちの作品がずらりと並べられている。しかし、階下の古典を並べた室からみると人影は少なく、ほとんど階段を上ってくる観賞者もいない。古典の前では、トレンチャコフ美術館でもそうであったが、半数をしめる母親と子どもたちが芸術の驚ろきに目を輝かせ母親の歴史の物語りに耳をすましているのである。

私は、ゴッギヤンの素朴な色彩と乾いたマチュールにこの国の未来の美術を考えていた。

がしふがちと 洋画材料

野田でございます

札幌・狸小路2・TEL (23)2203・工場 (24)6923